

弥生集落における放棄－廃絶に関する一考察

正 洋樹

1、集落の放棄と廃絶

集落が廃絶した原因を想定する場合、気候悪化による大規模な移住であるとか、災害、戦乱などのカストロフィ(悲劇的な終局)を想起する人が多いという。しかし、こんにち我々が目にする遺跡とは、かつてその場所で人間が活動し、その後その場所から離れたという一連の行動の結果であり、どのような集落遺跡もすべて住民によって放棄された結果廃絶したものであると言える。現在知り得る限りにおいて、実際にカストロフィ的な廃絶をしたと考えられるものは、例えば静岡県登呂遺跡(洪水)や群馬県黒井峯遺跡(火山噴火)などごく一部に過ぎず、その他の大部分の集落遺跡は、別の何らかの原因によって放棄－廃絶という過程を経てきたのである。

集落の廃絶を引き起こした、住民の放棄行動をひとつの考古学のテーマとしてとらえてそれを研究の対象とすることは、1990年代から主に欧米で盛んになってきている。特に考古学的事例と民族考古学的事例をほぼ同列に扱う方法は、欧米の考古学において普遍的に行われており、過去の行動を探る上で有効な手法となっている。一方、日本における放棄および廃絶の研究は、床面遺物の精査を中心とした住居の廃絶をテーマにした論文が多く、集落の放棄－廃絶や地域の放棄に関する研究はあまり多くない。

ところで、このような住居や集落の放棄－廃絶を研究するためには、まずその集落を営んだ集団の生計戦略や行動などを前提として理解しておかなくてはならない。すなわち、狩猟採集が主要なエネルギー獲得手段であった縄文時代と、農耕が本格的に開始された弥生時代とでは、住居や集落、そして集落の放棄－廃絶における問題は、当然に異なっている。ことに弥生集落がその耕作地と定住地を放棄するということは、自らの生計戦略に重大な影響を与えるものであり、そこに相当のモチベーション(動機)があったであろうということは、想像するに難くない。ところが弥生人が自らの生計戦略に影響を与えるほど大きなモチベーションを持っていたはずであるにも関わらず、筆者が見る限りこれまで弥生集落の放棄－廃絶には、あまり大きな関心が持たれていなかった。

たように思われる。竪穴住居の放棄－廃絶に関する研究や集落の消長に関する研究は盛んに行われているが、住居の放棄－廃絶という現象から、集落の放棄－廃絶の様相までを俯瞰的に追及した研究は、やはりそれほど多くない。

本稿は、個々の住居址の床面出土遺物の出土状況や火災の有無など、集落内部において観察した放棄－廃絶の様相を検討し、最終的にはマクロ的な視点、すなわち1つの集落のみでなく周辺の集落の動態から考えられる放棄－廃絶の様相の検討につなげることが目的である。

ところで、農耕が本格的に開始され定住するようになった集落の廃絶を検討するにあたっては、相模原市のもつ特徴である、「弥生時代の集落が見つからない」という大きな問題がある。そこで、今回は神奈川県内の代表的な環濠集落である弥生時代中期後半・宮ノ台期の大塚遺跡(横浜市)を取り上げ、上記のような視点で集落の放棄－廃絶の検討を行う。しかるのち、相模原市内の集落址研究に応用したい。

なお、本稿のなかでは「放棄」と「廃絶」という言葉を両方用いている。一般的には廃絶という言葉が用いられているが、英語では放棄(Abandonment)と表現する(Cameron ほか 1994)。これらの語句はよく混同されるが、放棄という行動の結果として廃絶があるのであって、廃絶を研究する際には、それをもたらした放棄行動も同時に考える必要がある。放棄行動と廃絶は一体のものとしてとらえ、以後の論を進めていく。語句としては不適切かもしれないが、これらの一連の関係を本稿では「放棄－廃絶」という言葉で表記する。また、「遺跡」という言葉と「集落」という言葉を両方用いている。前者は現在確認できるいわゆる遺跡のことを指すが、後者は当時の住民集団そのもの、もしくは彼らが住んでいた場所を指す場合に用いることとする。

2、事例の検討

本稿で事例として取り上げる大塚遺跡は、鶴見川の支流、早瀬川左岸の小高い丘<下末吉台地>の上にある。宮ノ台期に形成され、短期間のうちに廃絶した環濠集落

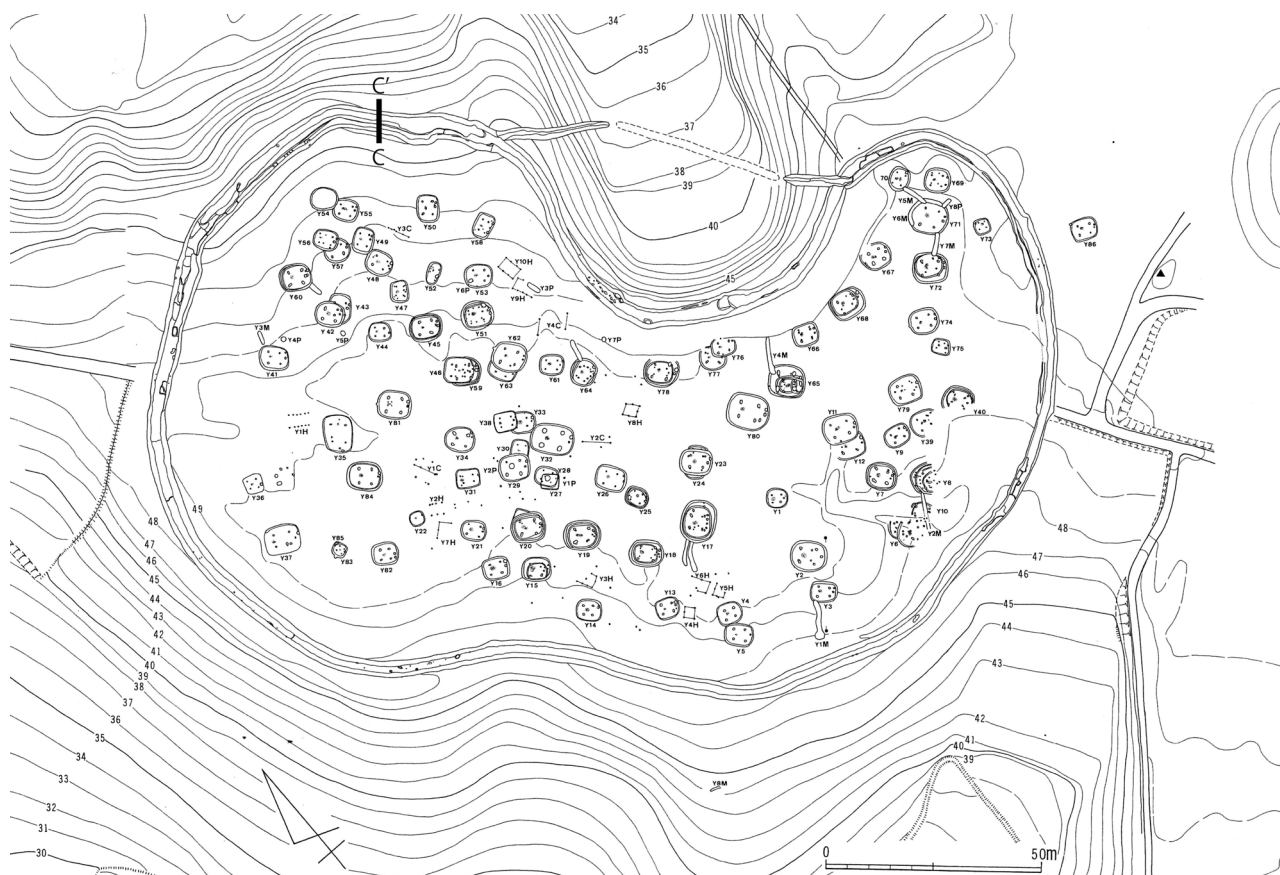


図1 大塚遺跡全体図

である（図1）。環濠は新旧2本あるが、一部を除いて重複している。新しい方がA環濠、古い方がB環濠とされている。これら環濠の幅はおおよそ6～7m、深さは4～5mとしっかりとした環濠である（図2）。なお、図2のC側

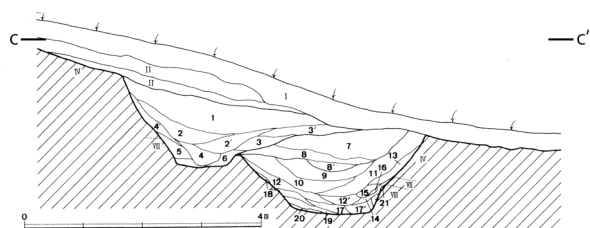


図2 環濠土層断面図

がA環濠、C'側がB環濠である。環濠の平面形はそら豆型で長径は約200m、短径は約100m、面積は約22,000平方mである。環濠内部には125軒（注1）の住居址があり、そのほとんどは小判型あるいは楕円形である。当遺跡では弥生時代中期後半・宮ノ台期の多数の住居址と、少数の弥生時代後期の住居址が検出されているが、これらの住居址の間には連続性がないと考えられている（横浜市埋蔵文化財センター 1991）。本稿の主題は大塚遺跡の宮ノ台期に属する集落の放棄・廃絶の様相であるため、

後期の住居址については言及しない。

ところで、大塚遺跡の住居址のいくつかは、床面から出土した土器と環濠から出土した土器との層位から、大きく3つの時期に区分されている。（小宮 1994）。これを本稿では大塚Ⅰ期～大塚Ⅲ期と記す。大塚Ⅰ期はB環濠の下層と中層下部から出土した土器の時期、大塚Ⅱ期はB環濠中層上部から出土した土器の時期、大塚Ⅲ期はB環濠上層とA環濠全体から出土した土器の時期である。中期に属するすべての住居址のうち、大塚Ⅰ期に属する住居址が14軒、大塚Ⅱ期に属する住居址が19軒、大塚Ⅲ期に属する住居址が20軒と、時期が判別された住居址は全体の約6割となっている。以下の検討は、これら時期が判別された住居址を中心に行う。

観察の方法は主に、個々の住居址の遺存状況を具体的に検討することであるが、その前段階として住居址の最終段階の様相を探る重要となる、床面出土遺物と住居の火災という二つの要素について確認しておく。

(1) 床面出土遺物

床面出土遺物の状態が示しているものは、概ね住居廃絶当時の姿だといえる。廃絶後に何らかの人為的・自然

的改変を受け、廃絶当時の状態を維持できていない例も多数あるが、後世の攪乱がない住居址の床面出土遺物に限って言えば、おおむね廃絶当時の様相を示しているといつて差し支えないだろう。これら床面出土遺物の構成及び数量と出土状態を観察することによって、その住居址がどのように廃棄され、廃絶したかをある程度推し量ることができる。

遺物の中心となる宮ノ台期の土器の器形としては、甕（小型甕、台付甕も含む）、壺（広口壺も含む）、高坏、鉢、碗などがあげられる。そこでまず当該期の器形の一般的な構成割合を確認する。大塚遺跡を含む下末吉台地3つの弥生集落遺跡（大塚遺跡、折本西原遺跡、砂田台遺跡）の住居址床面から出土した土器の数量をカウントした研究（宍戸 1996）をもとに住居址1軒あたりの床面出土土器の平均個体数を算出すると、壺が1.65個、甕が1.15個、鉢が0.13個、高坏が0.06個、碗が0.03個という数字が得られる。この数字は遺物の出土の有無に関係なく全住居址を母数にしているため、かなり低い値となっている。この母数を、遺物が出土した住居址数にすると次のとおりとなる。壺が6.84個、甕が5.9個、高坏が1.0個、鉢が1.2個、碗が1.2個である。この数字は当時用いられていた実際の個数とは異なることは間違いないが、出土時にそれぞれの器形の土器がどのような割合で構成されていたかという傾向をとらえることができる。

また、器形を特に意識せずに床面出土土器の総個体数で考えた場合、弥生時代～古墳時代の住居址床面から出土した土器の数を計上し、床面出土遺物が4個体以上かそれ以下かで分けることができる、と判断した論がある（桐生 1993b）。この例は大塚遺跡とは時代も地域も異なる上、ひとつの住居址で用いていた土器が4個体というのは当時実際に用いられていたはずの土器個体数に比べて明らかに少ないと言えるが、大塚遺跡の宮ノ台期住居址1軒あたりの出土土器個体数の平均が2.7個程度であること（注2）を考えると、この数字が床面からの出土土器個体数の多寡を判断する一つの目安として排除するほど不適切なものだとは考えにくい。したがって、この4個体という数字を一つの目安として念頭においておきたい。

ところで、土器に本来与えられていた利用方法の他に、土器の転用についても考えておかねばならない。例えば口頸部から下が破損した土器を埋めて炉として利用するといった転用の例はかなり多い。したがって完形の土器ではなくても遺存部位が一周して形が整っていればそれは住居廃絶時に使用されていた可能性が十分に考えられる（宍戸 1996）。このことから、床面出土土器のうち、(1)

完形もしくは略完形のもの、(2) 破片の場合、飛散状況が著しくないもの、(3) 口縁部・胴部・脚部のいずれかを欠くが、遺存場所が一周しており道具としての使用が可能なもの、以上の3パターンの土器を廃絶当時使用されていた可能性が高い土器として検討を行った（注3）。ただし、住居址床面から出土した土器であってもあまりに欠損が多く使用可能とは考えられないものもあるため、これらは除外した。なお、石器に関しては後述する。

(2) 火災住居

住居址における火災の有無は住居址の性格を検討する上で重要な要素の一つである。火災の有無を明らかにすることは、住居放棄の様相を知る大きな手がかりとなる。大塚遺跡の住居址のうち火災の有無が判別できた住居址である85軒を母数にして計算すると、火災の痕跡があった住居址は39軒、割合は約46%となる。この数字がどのような意味を持つのかは後ほど検討を加える。

さて、住居の火災には大きく分けて2種類ある。ひとつは「意図しない（突発的な）火災」であり、もうひとつは「意図的な火災」である。意図しない火災、すなわち突発的な火災には、炉や焚火の火などが住居に燃え移ったといった火災や、紛争による被害としての火災などがこれに含まれる。つまり住人が意図したものではない、いわゆる不慮の火災である。これら不慮の火災に遭遇した住居址を、本稿では不慮廃屋と記す。（注4）

一方、意図的な火災とは、住居に対する意図的な放火のことである。すなわち住居の焼却処分のことである。住居を焼却するのはいくつかの理由が考えられる。老朽化のための処分、シロアリ等の根本的な駆除、死人や病人が出た住居への儀礼的な放火などである。このような意図的に焼却された住居址を本稿では焼却廃屋と記す。

このような火災住居に着目した研究はこれまでいくつものなされてきた（桐生 1993b、小林謙一 1996、石森 1996、久世 2001）が、その中で共通して指摘されているのは、意図しない火災と意図的な火災とではその性質が大きく異なるので、これらは明確に分類されるべきだということである。しかし意図しない火災と意図的な火災とを住居址の出土状態から判別するのは困難である。床面出土の遺物が多ければ不慮廃屋、少なければ焼却廃屋と、床面出土遺物の多寡をもって判断する方法が提示されている（桐生 1993b）が、もちろん個数だけで判断するのではなく、一軒一軒の住居址について遺物の出土状況等と総合して判断する必要がある。

なお、上記の例に挙げた儀礼的な放火（住人の死や病氣などに伴う放火）については、文化人類学や民族学の

テーマとして取り上げられることはあっても考古学の分野では言及するのが難しい。海外では、アメリカ大陸原住民の Navajo 族に、住人の死に際し土器を投棄した上で住居に放火する儀礼が行われている例がある。しかし、残念ながら弥生時代の大塚集落にそのような儀礼はあったのかどうかは判断しがたい。

(3) 遺物と火災の有無による住居址の分類

次に、表1の大塚遺跡住居址のうち、時期や火災の有無が確認できた住居址を中心に、これら住居址をいくつかの特徴から分類して検討を加える。

ア 火災住居址

先に述べたように、火災住居は突発的な火災が発生した不慮廃屋と、意図的に放火が行われた焼却廃屋に分けることができる。またその判断にあたっては床面出土遺物の多寡も重要な要素となる。大塚遺跡の火災住居址では、非火災住居址に比べて出土土器数が多い

傾向があると指摘されており（横浜市埋蔵文化財センター 1991）、火災住居の検討に際しては、遺物の出土状況や土器そのものの状態と個体数両方をよく確認する必要がある。なお、本稿では誌面の都合上、遺物の図版は示していないということをご了承いただきたい。

以下、床面出土遺物の個体数が相対的に多い住居址と、皆無もしくは相対的に少なかった住居址とに分類し、個々の例を挙げる。

アー 1 床面出土遺物が多い火災住居址（表2）

住居址	期	火災	床面出土土器数	出土内容	石器	重量(g)
Y26	I	有	-	破片多数	0	0.0
Y28	I	有	8	甕2(下半部1)、壺5、広口壺1	0	0.0
Y61	I	有	4	壺1、壺2、鉢1	0	0.0
Y40	II	有	10	壺4、壺6	0	0.0
Y49	II	有	5	壺3、鉢2	7	666.2
Y15	III	有	6	壺4、台付壺1、鉢1	3	463.3
Y51	III	有	15	壺6、壺8、鉢1	5	7425.3

表2 床面出土遺物が多い火災住居址

Y15号住居址から出土した壺の口縁部は、20mほど離れたY21号住居址の床面及び覆土、Y26号住居址の覆土から出土した破片と接合しており、またY51号住居址や

Y61号住居址には、床面の土器に接合する破片が堆積土から出土するなど、これらの住居址には火災ののちに片付け等の整理をした形跡が見られた。

またY49号住居址など、床面からも覆土からも土器片が大量に出土した住居址もみられる。これらは突発的な火災の後に使用可能な道具類を拾い上げるなどの整理が試みられ、そののちに廃棄物が投げ込まれたのであろうか。

Y51号住居址（図3）は、火災後に整理が行われた形跡があるものの、床面出土遺物は略完形品や一括品が比較的多く出土位置もまとまっており、また器形の割合にも偏りが無い。したがってこれを典型的な不慮廃屋とすることに大きな問題は無いと考えられる。また、Y49号住居址（図4）からは、完形の土器が複数出土している。大塚遺跡の住居址内において完形の土器が出土する例は少ないが、これはそのうちのひとつである。器形に大きな偏りもなく、石器も破損が少ない状態のまま被熱しているものが有り、この住居址も不慮廃屋とするのに問題はないだろう。

一方、Y26号住居址（図5）の床面か

ら出土した土器類は個体数としては大量に数え上げられるが、ほとんどのものは大きく欠損している。したがってこれらの土器類が火災発生直前に使用されていたものかどうかは疑問が残る。火災後の整理によってこのような出土状態になったとも考えられるが、焼却処分をする際に破損して不要となった土器類を床面に投棄してから火を放った可能性も十分に考えられる。不慮廃屋と焼却廃屋のどちらの可能性もあるが、断定はできない。

これら床面出土土器の多い火災住居址は、安易に断定

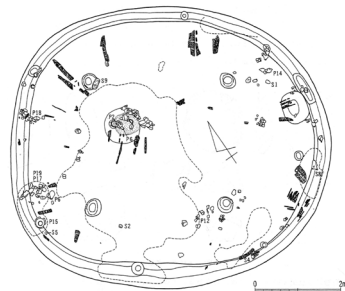


図3 Y51号住居址

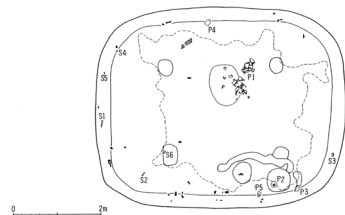


図4 Y49号住居址

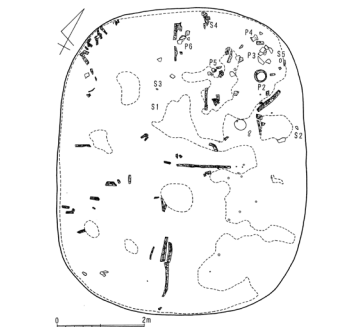


図5 Y26号住居址

はできないものの、概して不慮廃屋であるという可能性が高いと思われる。軒数を考えると、大塚遺跡の火災住居のうち明らかに不慮廃屋だと判断できる住居址はそれほど多くない。

ア－2 床面出土遺物が少ない火災住居址 (表3)

住居址	期	火災	床面出土土器類	出土内容	石器	重量(g)
Y4	I	有	0		0	0.0
Y16	I	有	0	炉転用釜1	2	41.1
Y25	I	有	0		0	0.0
Y3	II	有	0		0	0.0
Y42	II	有	0		0	0.0
Y53	II	有	0		0	0.0
Y78	III	有	0		5	444.6
Y84	III	有	1	甕上半部1	3	1007.4

表3 床面出土遺物が少ない火災住居址

火災の痕跡があるにもかかわらず、床面から出土した遺物がほとんど見られない住居址である。ただし、Y78住居址やY84住居址など、石器が個数やグラム数では比較的多く出土している例もある。だがこれらの石器類はいずれも破損しており、火災にあった時点で使用可能であったものなのか疑問が残ることから、遺物が少ない住居址の範疇に含めた。

これらの住居址は、火災が発生する前の時点で使用可能な道具類をあらかじめ家屋の外に持ち出した例だと考えられる。突発的な火災ののちに床面を整理したとしても遺物がここまで完全に取り除かれるとは考えにくい。したがって、これらの住居址はいわゆる焼却処分をされたものだと推定できる。

なお、住居を廃棄する際に焼却をせず、再利用可能な建築用部材を取り去る行為についてはこれまでもたびたび議論されているが(久世 2001)、害虫に侵された住居や病人等が出たために行った焼却であればこういった部材の再利用はされないというのが一般的な理解である。

イ 非火災住居址

時期が判別できた住居址のうち、大塚Ⅰ期に該当する住居の約21%、大塚Ⅱ期の約30%、大塚Ⅲ期の約60%は火災の痕跡がない住居址である。これらは焼却処分を行わずに放棄された住居である。これらの住居址の放棄—廃絶の様相をうかがい知ることは容易ではないが、ここでも床面出土遺物が多いものと少ないものとに分類し、また柱を引きぬかれた痕跡のある住居址もあわせて示す。

イ－1 床面出土遺物が多い非火災住居址 (表4)

住居址	期	火災	床面出土土器類	出土内容	石器	重量(g)
Y50	II	無	6	甕3、壺3、鉢1	0	0.0
Y69	II	無	2	甕2ほか一括品多数	3	208.8
Y54	III	無	6	甕6	0	0.0
Y72	III	無	7	甕3、台付甕1、壺3	0	0.0
Y80	III	無	5	甕1、壺4	2	200.2

表4 床面出土遺物が多い非火災住居址

大塚遺跡における非火災住居址の多くは、床面からは少量の土器しか出土しない。完形の土器が出土する例は

ほとんど無いといつてよい。火災にあわずに放棄された住居からは、何らかの理由で住人が一斉に死亡してしまったなどという事態を除けば、使用可能な土器や石器などは持ちだされたと想定するのが妥当である。つまり放置された住居に残された土器や石器などは不要なものとして捨て置かれた結果である可能性が高いといえる。これを本稿では放置住居と記す。ただし放火を伴わない何かしらの儀礼が行われた結果である可能性もある。

Y50号住居址(図6)及びY69号住居址(図7)からは多くの土器が床面から出土しているが、いずれの土器も欠損が著しく、またY50号住居址では床面と覆土の2層から出土した土器が、Y69号住居址では覆土の1層と3層から出土した土器がそれぞれ接合した。したがって、これらの土器が住居廃絶時に使用可能な状態のものであった可能性は低いといえる。

また、Y54号住居址(図8)は柱穴のない竪穴状遺構であり、一般的な住居と呼べるものか定かではない。ここから出土した6個体の壺は、遺構内床面の一箇所からまとまって出土したものである。特異な形で出土しているため、これを祭祀の痕跡とする考え方もある(横浜市埋蔵文化財センター 1991)が、その性格は不明と言わざるを得ない。また、Y72号住居址、Y80号住居址は出土遺物が多い住居址の範疇に入る。完形品は無いものの、

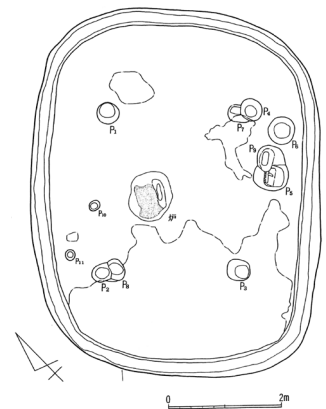


図6 Y50号住居址

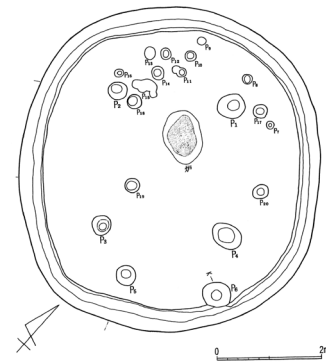


図7 Y69号住居址

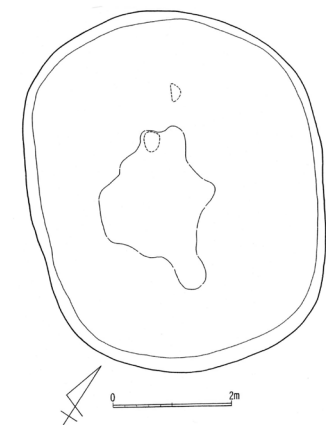


図8 Y54号竪穴状遺構

略完形の土器が数点出土している。

ここで放棄された住居に残される道具の量に関する民族学的調査の結果を参考として挙げる。Schiffer は民族学的調査から、放棄された住居に土器や石器などが多く残される理由として、(1) 放棄が急速であった、(2) 運搬手段が不十分であった、(3) 次に向かう集落までの距離が長かった、(4) 再び戻ってくる予定があった、という4つのケースを設定した (Schiffer 1987)。大塚遺跡のこのタイプの住居址もこのような状況であったのではないかと考えられる。

イー2 床面出土遺物が少ない非火災住居址 (表5)

住居址	期	火災	床面出土遺物数	出土内容	石器	重量(g)
Y11	I	無	1	壺1	1	200.6
Y55	III	無	0	破片のみ	0	0.0
Y66	III	無	3	壺上半部のみ	0	0.0
Y76	III	無	1	壺上半部1	2	354.7
Y79	III	無	2	壺上半部1	2	683.5
Y81	III	無	2	壺胴部1、壺底	3	326.1
Y82	III	無	3	壺口頸部3	0	0.0

表5 床面出土遺物が少ない非火災住居址

放置住居の様態の一つだが、表5のとおり、放置された住居址は概して床面出土遺物が少ない。ただしいずれの住居址も覆土からの遺物の量は他の住居址との明確な差異はなく、他の放棄住居と同様、廃絶後には不要物の投棄場所になったと考えられる。

イー3 ピット内から遺物が出土した非火災住居址 (表6)

住居址	期	火災	床面出土遺物数	出土内容	石器	重量(g)
Y12	I	無	1	壺頸部1	2	144.0
Y69	II	無	2+	一括品多数	3	208.8
Y55	III	無	0		0	0.0
Y32	不明	無	4	壺2、壺2	3	388.9

表6 ピット内から遺物が出土した非火災住居址住居址期火災床面出土土

この中では、Y12号住居址(図9)のPit4から砥石が、Y55号住居址のPit4から礫が、Y69号住居址(図6)のPit1から磨製両刃石斧がそれぞれ出土している。(ただしY55号住居址出土の礫は、石器と考えるよりも礎石のような役割を果たし

ていたと考えるほうが妥当である。(横浜市ふるさと歴史財団1994))

これらの住居址は、床面出土遺物が少ないということが大きな特徴である。Y12号住居址には床面出土遺物は極めて少ないし、Y69号住居址は前述のとおり覆土から

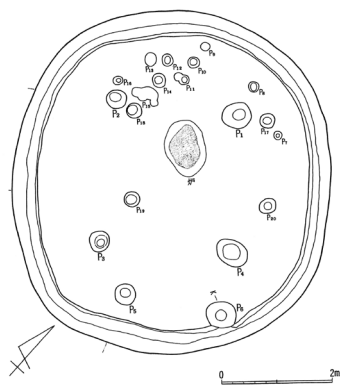


図9 Y12号住居址

出土した遺物が多いものの、床面出土遺物はやはり少ない。そしてピット内に遺物があるということは、住居址が自然の堆積によって埋没するより以前に、柱材が引き抜かれたということを意味している。これらの住居は、放火を伴わない住居の解体が行われていたことを示しているであろう。例えば他の住居の新築・改築の際に既存の住居の部材を再利用した可能性がある。新たな部材を森林から切り出してくるよりも可能な限り集落内にある部材を再利用する方がより労力を使わないで済むので、これが頻繁に行われた可能性もある。だがここで集落内と限定したのは、集落間の移住といった長距離を移動する際にもこのような部材の再利用を行ったのか疑問が残るためである。

また、Y32号住居址は柱材が抜かれてから柱穴を掘り広げ、4つの柱穴全てに土器の一括品が埋められていたものである(図10)。何らかの祭祀が行われていた可能性が高いが、詳細は不明とせざるを得ない。

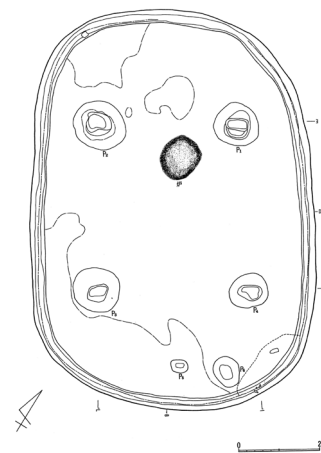


図10 Y32号住居址

ウ 床面出土遺物のまとめ

○土器

住居址床面から出土した土器には完形のものが少なく、またその破損状況や出土状況も住居址によってまちまちである。概して言えば、不慮廃屋と考えられる住居址以外から出土した土器は、不要物として捨てられたり放置されたりしたものである可能性が高いようである。逆に、不慮廃屋の床面から出土した遺物は、住居が放棄される直前まで使用されていたものである可能性が高いといえる。

○石器

石器についてここでまとめるが、石器の場合は個体ごとに大きさや質量が大きく異なるため、個体数だけではなくグラム数も表している。

住居址床面から出土した石器の種類は扁平片刃石斧などの石斧、敲打具、砥石などが中心となっている。Y17号住居址からは住居床面の南東隅の壁近くから、9点の土器が一括して出土している(図11)。そのほとんどが扁平片刃石斧とその未製品や原材であるが、周囲に石器の破片等は検出されないことから、ここで石器の製作が

行われていたのではなく、別の場所で製作された石器や製作途中の石器をまとめたデポとしていたのが、何らかの原因によってそのまま放置されたものであろう。

Y51号住居址床面出土の石器は、敲打具の未製品や扁平片刃石斧があるが、その他は大型砥石や砥石の破片で

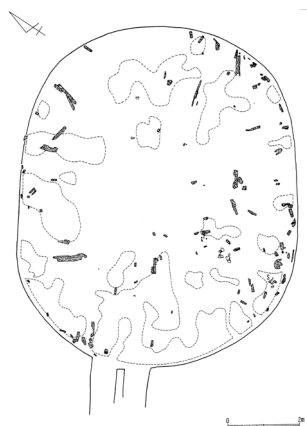


図11 Y17号住居址

ある。表面に炭化物が付着しているものもある。この炭化物が火災によって付着したものなのか否かは不明である。

Y49号住居址出土の柱状片刃石斧は被熱してはぜており、直接火災に遭遇したものと考えられる。火災直前まで道具として使われていた状態であったのだとすれば、Y49号住居址は不慮廃屋であるという推定の根拠の一つとなる。

大塚遺跡では住居の床面から出土した石器には欠損品が多い。というよりもむしろ欠損がない石器は少ない。石器は土器に比べて耐久性や運搬性が優れていることから、使用可能な石器は住居を放棄する際に次の住居へ搬出されたと考えるのが妥当だろう。そのように考えれば床面に遺された石器に欠損品が多いのはある意味当然と言える。

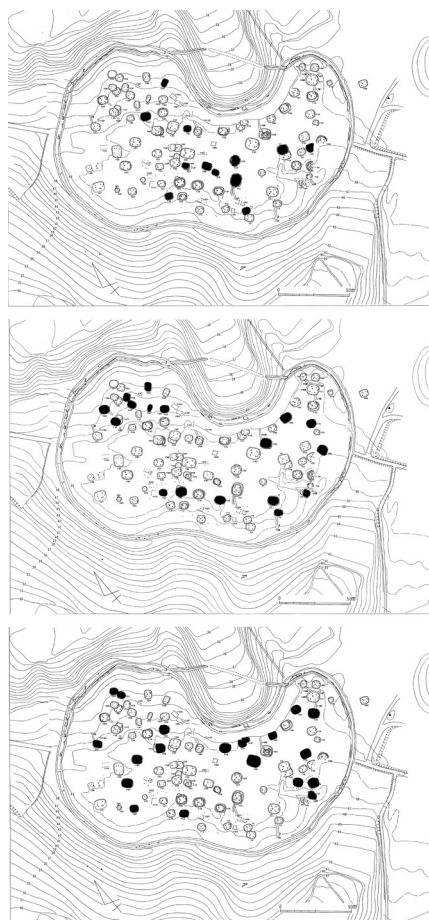
エ 住居址の分布及び形態の検討

本稿では住居址の検討に際し、床面出土遺物の種類と多寡、及び火災の有無に重点を置いているが、住居址の集落内における分布や平面形からは、どのようなことが看取できるのだろうか。

エー1 分布および平面形

大塚遺跡の住居址分布に関する研究は、集落内部のいわゆる単位集団を判別しようという試みから始まっている。大塚遺跡の中央部には広場のような空間があり、全体的に見るといくつかの大きな住居址のまとまりが捉えられる。それは北群、西群、東群という形で表現され、それぞれが単位集団であったという考え方がなされている（横浜市埋蔵文化財センター 1991）。

時期別の住居址の分布をまとめて図示した（図12）が、これによれば各時期と所属する群との間には特段の関係性は認められない。またそれぞれの時期における住居址の分布をみると、大塚Ⅰ期に属する住居址は少数で、かつ中央部に密集しているように見える。これは、大塚遺



大塚Ⅰ期

大塚Ⅱ期

大塚Ⅲ期

図12 時期別の住居址分布

跡の住居址には住居の拡張などの連続的重複（注5）が存在しているため、大塚Ⅰ期に存在した住居がそのまま拡張されて大塚Ⅱ期、大塚Ⅲ期まで存続した場合に、大塚Ⅱ期や大塚Ⅲ期に属する住居址として認識されてしまった事が理由であろう。また、非連続的重複であっても、それ以前に存在した住居を完全に覆ってしまっている住居址もある。それぞれの時期に属する住居址の重複の最大値は、大塚Ⅰ期が3軒、大塚Ⅱ期が6軒、大塚Ⅲ期が2軒となっており（注6）、大塚Ⅱ期に重複が多いことから当該期に属する期間は他の時期に比べて相対的に長かったか、あるいは大塚Ⅰ期から継続して存在した住居址が多かったということが考えられる。したがって大塚Ⅰ期に属する住居数が以後の時期に比して少数であると理解する必要はなく、各時期における住居址の分布に特段の偏りは無いと判断できる。

また、大塚遺跡の住居址の平面形は円形・楕円形・隅円長方形・長方形・隅円方形の5つのタイプに分けることができる。このような住居址の平面形をもとに、住居の分布や集落の変遷、集団の構成など、集落内部の様相

を追求しようという試みも行われているが（倉林 1997）、結論から述べると平面形からの分析は困難であり、住居の分布については一定の成果を得ているものの、その他の分析は残念ながら成功しているとはいいがたい（注7）。

エー2 住居間の距離

集落内の住居の分布を検討する場合には、その集落内の住居間の距離を具体的に算出する必要がある。

最近接尺度値という値を求めてその分布状態を統計的に表現することで、住居間の距離がどの程度分散していたか、あるいは密集していたかを数学的に求め、判断することができる（注8）。様々な分析パターンにおける最近接尺度値を計算した研究では（倉林 1997）、大塚集落の住居の分布は均等に近い傾向が看取された。この結果から得られる意味は様々であろうが、ここで着目したいのは、住居は密集していたのではなく各住居間には一定以上の距離が保たれていたということである。意図的に火を放つ焼却処分に耐えられるだけの距離を大塚集落の住居群が持っていたと言い換えることもできる。一般的に集落内の住居が密集していたのであれば、類焼する危険性から意図的な放火を行わない（あるいは行えない）と考えられる。しかし大塚集落においてはその問題を除外して考えることができる。

オ 環濠出土の土器

最後に環濠出土の土器について触れておく。大塚遺跡の環濠はA環濠、B環濠の新旧2本が検出されている。（図2）そのうちA環濠は新しく掘り直されたものである。また、B環濠では上層・中層上部・中層下部・下層と、層位的に土器が出土している。このことから、A環濠とB環濠の4層をあわせて、環濠の層位を5つの段階に区分することができる。住居址の時期に当てはめると、B環濠下層および中層下部が大塚Ⅰ期に、B環濠中層上部が大塚Ⅱ期に、A環濠及びB環濠上層が大塚Ⅲ期にそれぞれ相当する。

環濠から出土した土器片全体の層位別出土比率を求めると、下層が約10%、中層下部が約19%、中層上部が約28%、上層が約44%となり、新しくなるに連れて増加していく傾向が見られる。

ところが、完形や略完形の土器の比率は、上記の状況とは大きく異なっている。中層下部に完形の土器が大量に廃棄されていることもあり、割合を求めると下層が約20%、中層下部が約53%、中層上部が約22%、上層が約6%となる。中層下部の多さと上層の少なさが目立つ。中層下部は大塚Ⅰ期に相当するが、この時期に完形の土器が環濠内に大量に廃棄されている理由は不明である。当該期における大規模な災害の可能性も指摘されている（横

浜市埋蔵文化財センター 1991）が、大塚Ⅰ期と大塚Ⅱ期に属する住居址の遺存状況に明確な差異は見当たらないことから、この時期に大規模な災害があったと考えるのは難しい。あるいは、上層からの完形土器出土数が非常に少ないことから、集落そのものが漸次縮小したという可能性も考えられる。しかし大塚Ⅲ期に属する住居址の軒数を考慮すると、その可能性も低いと言わざるを得ない。つまりところ大塚Ⅰ期に大量の完形土器が廃棄されている理由を明確に説明することは困難である。いずれにせよ、大塚Ⅲ期に相当する環濠の層位には完形の土器が少ないという状況に変わりはない。これらの事実が示す意味については後ほど改めて取り上げる。

3、住居址の状況から捉えた大塚集落の放棄－廃絶

さて、ここまでは住居址の時期区分を厳密に扱わずに検討を行ってきたのであるが、次は時間軸に重点を置いて、住居址のより詳細な検討を試みる。

先にも触れたが、大塚遺跡の住居址の一部は大きく3つの時期に分類することができる。これは相対的な時期区分であり、それぞれの時期の絶対的な長さは均一ではない。しかし、宮ノ台式土器の細分から得られたこの時期区分は大塚集落の形成から廃絶までを探る上での極めて重要な情報となる。特に大塚Ⅲ期に属する住居址は大塚Ⅰ期や大塚Ⅱ期のそれに比して集落の放棄－廃絶のプロセスをより深く反映しているものと考えられる。大塚Ⅰ期や大塚Ⅱ期の住居址の放棄－廃絶があくまで主として集落内部における行動であるのに対して、大塚Ⅲ期に属する住居址の多くは大塚遺跡の集落そのものの終焉に関わっているからである。もちろん大塚Ⅲ期の住居址であっても集落そのものが廃絶する以前に放棄－廃絶の道をたどった例があるだろうが、大塚遺跡の存続期間は短いため（小宮 1994）、大塚Ⅲ期の住居址の多くは大塚遺跡そのものの最終段階の状況を強く反映していると言える。したがって、大塚集落の放棄－廃絶の状況を探る上で、大塚Ⅲ期の住居址の放棄－廃絶の様相がより重要になる。

表7に、時期が判別したすべての住居址における火災の有無と床面出

住居址	火災	床面出土土器数
大塚Ⅰ期		
Y4	有	0
Y16	有	1
Y17	有	2
Y25	有	0
Y26	有	0
Y28	有	8
Y39	有	6
Y45	有	4
Y58	有	2
Y61	有	4
Y11	無	1
Y12	無	0
大塚Ⅱ期		
Y2	有	4
Y3	有	0
Y18	有	2
Y20	有	9
Y40	有	10
Y42	有	0
Y48	有	6
Y49	有	5
Y53	有	0
Y65	有	4
Y68	有	3
Y71	有	2
Y74	有	1
Y50	無	6
Y52	無	0
Y60	無	4
Y69	無	2
大塚Ⅲ期		
Y07	有	7
Y15	有	6
Y41	有	4
Y51	有	15
Y59	有	1
Y77	有	3
Y78	有	0
Y84	有	1
Y54	無	6
Y55	無	0
Y66	無	3
Y72	無	7
Y76	無	1
Y79	無	2
Y80	無	5
Y81	無	2
Y82	無	3

図7 住居址の時期別一覧

土遺物の個体数をまとめた。また、表8では火災の有無及び時期で分類した住居址床面出土土器の平均個体数を示した。

	I期	II期	III期	通期
火災あり	2.70	3.54	4.63	3.54
火災なし	0.50	3.00	3.22	2.80
全体	2.33	3.41	3.88	3.30 (個)

表8 床面出土土器の個体数

大塚Ⅰ期及び大塚Ⅱ期における火災住居の割合とⅢ期における火災住居の割合とを比較すると、大塚Ⅲ期における火災住居の割合が明らかに低い。火災住居の割合については、「大塚Ⅰ期及び大塚Ⅱ期における火災の割合が高い」と捉えるべきなのか、あるいは「大塚Ⅲ期における火災の割合が低い」と捉えるべきなのか、着目する点を正しく認識しなくてはならない。そこで、大塚遺跡の周辺、鶴見川・早瀬川流域の下末吉台地に存在する他の弥生時代集落における火災住居址の割合を確認する。環濠集落では権田原遺跡が約54% (15軒／18軒)、朝光寺原遺跡では約38% (15／40)、折本西原遺跡が約1.2% (1／84)、小規模集落では新羽大嶽遺跡が約11% (1／9)、山王山遺跡が約42% (5／12)、大棚杉山神社遺跡が約36% (5／14) となっている。一方、大塚遺跡では大塚Ⅰ期が約85% (11／13)、大塚Ⅱ期が約76% (13／17)、大塚Ⅲ期が約47% (8／17) となる。一見、大塚遺跡の大塚Ⅰ期、大塚Ⅱ期の火災の割合が飛び抜けて高いように見える。しかし、大塚遺跡の住居址のうち時期が判明しなかった住居址では火災の割合が約17% (5／30) であるため、本遺跡における時期が判別されている住居址の火災の割合は、本来の軒数よりも高めの数字が算出されているのである。試みに、時期が判別できなかった住居址の数を大塚Ⅰ期から大塚Ⅲ期に属する住居址にそれぞれ均等に振り分けた上で火災住居の割合を改めて計算すると、大塚Ⅰ期が約52%、大塚Ⅱ期が約53%、大塚Ⅲ期が約33% となる。これらの数字は他の集落に比しても決して高い数字ではない。さらに大塚遺跡全体における火災住居の割合は約46% (39／85) であることから、大塚Ⅲ期の数字で大塚遺跡全体の火災住居の割合を下げていけると言える。したがって、大塚遺跡では「大塚Ⅰ期及び大塚Ⅱ期における火災の割合が高い」のではなく、「大塚Ⅲ期における火災割合が低い」という表現の方がより適切なのである。

また、床面出土土器の個体数については、大塚Ⅰ期及び大塚Ⅱ期に属する住居址床面から出土した土器の1軒当たりの平均個数に比べ、大塚Ⅲ期に属する住居址のそれが多いことが指摘できる。特に非火災住居址における床面出土土器の個体数が多いという特徴から、大塚Ⅲ期

になって自然廃屋と呼べる住居址、遺物が多く遺されている住居址が増加したことが確認できる。(注9)

これらのことから大塚Ⅲ期における住居の放棄－廃絶の特徴を簡潔に述べると、次のとおりとなる。

大塚Ⅲ期における住居の放棄－廃絶は、大塚Ⅰ期及び大塚Ⅱ期におけるそれとは異なった様相を示す。大塚Ⅰ期や大塚Ⅱ期の段階に比べて火災の割合が激減し、自然廃屋が増加する。床面に遺される土器や石器の数が多くなるものの、利用可能な道具類が大量に遺存するようなケースはほとんど無い。

この大塚Ⅲ期の住居の放棄行動そのものは、大塚集落自体の放棄－廃絶の様相と深く関わっている。したがって次に、このような大塚Ⅲ期の様相をもたらした大塚集落の放棄－廃絶の具体的なプロセスは一体どのようなものであったのか、言い換えれば、どのような放棄行動を取ればこのような結果が生まれるのか、ということに着目する。

4. プロセスからみた大塚集落の放棄－廃絶

ここでは放棄行動そのもの、放棄のプロセスに関する研究をいくつか参考にとりあげる。アメリカ大陸やアフリカ大陸の民族考古学の方法論による、放棄行動をテーマとした一連の研究の成果は、時間と空間を超えた日本の弥生時代の事例に直接当てはめられるものではないが、そこに示されているプロセスは十分参考にできるものである。

前述のSchifferの例の他にこれまで行われてきた、住居や集落の放棄プロセスの研究から得られた住居の放棄の様相と床面出土土器の状態の関係を決定する重要な要素として考えられているのは、移転先までの距離と再帰の予定、そして放棄が不慮のものかあるいは計画的なものかという、放棄の意思の有無である。(Brooks 1993) つまり、移転先までの距離と再帰の予定の有無の2つの要素に着目すると、以下のような組み合わせとなる。

- すなわち、
- (1) 短距離移動で帰還予定あり
 - (2) 長距離移動で帰還予定あり
 - (3) 短距離移動で帰還予定なし (あるいは当面なし)
 - (4) 長距離移動で帰還予定なし (あるいは当面なし)

である。そしてそれぞれのケースによって、現集落から持ち出すものと置いていくものの選択基準が変化したと考えられる。例えば(1)や(2)など、帰還予定がある場合には家財道具を残す傾向があるし、あるいは(3)や(4)などの場合は必要なものはできる限り持っていく傾向が見られる。家屋をどのように処置するかも重要な選択の要素であり、家屋がそのまま残されたのであれば、

帰還予定がある(1)(2)のパターンが想定できる。(ただし(4)の場合でも家屋が残される可能性がある。)また(3)の場合は、再利用可能な住居の部材を引き抜き、移動先に運搬する可能性もあるだろう。また、このような2つの要素だけでなく、計画的で漸進的なものであったのか、あるいは非計画的で突発的なものであったのかという違いも、放棄のプロセスに関わる重要な要素である。

このようなプロセスに則って実際に調査された例として、アメリカ原住民である Anasazi 族の住宅の放棄に関する研究がある (Schlanger, Wilshusen 1994)。そしてこの放棄の問題は上記の分類によって十分説明しうるものであるとの結論が導かれている。(注 10)

ところでここで着目したいのは、放棄のプロセスの差が実際に残された遺跡の状態の差として現れるということである。つまり集落の最終段階の様相と放棄行動とは関係が深く、発掘調査された遺跡の状態から、どのような放棄行動が行われたのかをある程度推察することができる、ということである。

これを参考にしたうえで、大塚集落における放棄－廃絶の具体的なプロセスを前節と同様に想定してみたい。前述のとおり、大塚Ⅲ期すなわち大塚集落の最終段階では非火災住居址が増加する。自然廃屋が多かったのである。また、道具類は比較的多く遺されているものの、家財道具一式を放置して慌てて放棄されたような住居址は見当たらない。このことから、戦乱や大規模な災害によるカタストロフィのような放棄－廃絶の可能性はまず排除される。大塚集落は漸進的に放棄が行われた、さらにいえばおそらく計画的に放棄が行われた、と考えられるのである。また、住居の解体に関して、柱を引き抜いた形跡のある住居址も存在するが、それが確認された住居址は大塚Ⅰ期及びⅡ期、時期不明がそれぞれ1軒ずつしかない。もちろん発掘調査の際に明確に判別できなかったケースが多いであろうが、すくなくとも大塚Ⅲ期に頻繁に柱が引きぬかれた形跡は認められない。したがって、大塚Ⅲ期の非火災住居址では柱などの住居用の部材がそのまま残された住居の方が多かったのではないだろうかと推測できる。そして住居用の部材が残されたということは、移動後の住居建築に際して大塚集落の住居の部材を引き抜いて運搬するよりも、新たに切り出した方がより労力が少なく済んだ、ということの意味しているともいえる。またあるいは、場合によって再び大塚集落に戻ってくる可能性があったのかもしれない。大塚Ⅲ期の非火災住居址の床面に遺された遺物には完形・略完形と呼べる土器は少なく、多くが欠損品である。また石器も使用可能な状態のまま放置されたと考えられるものは少

ない。家屋は残し、使用可能な道具類や持っていかねればならないものはできる限り移動先へ持っていったのだろう。大塚Ⅲ期の非火災住居の遺物はそのような放棄－廃絶の様相を反映しているものではないだろうか。

さらに、これは環濠からの遺物出土状況からも確認できる。前述のとおり環濠の上層からは土器の破片が多く出土しているが、完形の土器は少ない。おそらく、大塚集落では全期間を通じて割れた土器などの不要物や、何らかの要因で使用をやめた完形の土器などを環濠に投棄する行動が継続的に行われていた。そして大塚Ⅲ期終末期に至って集落を放棄することとなり、その際に使用可能な完形の土器や石器は住人によって集落外の新居住地に搬出された。そのため、環濠に完形の土器が廃棄されることが少なかったのではないだろうか。

大塚集落の住人たちは、土器類を軒並み搬出することができるほどの近距離の土地に、道具類を携帯して移住した。新たな建築部材を森から切り出す方が容易だったからのか(あるいは帰還の予定があったからなのか)、移住のために住居を解体することはしなかったようだ。大塚集落はこのようなプロセスで放棄－廃絶したのだろう。

5、 今後の展望：集落の動態からみた大塚集落の放棄－廃絶

以上、大塚集落内の住居址に主な視点をおきながら検討を加え、その放棄－廃絶の様相を解明しようと試みた。本稿はいったんここまでとするが、今後の展望について方針を示しておきたい。

今後は視点をマクロ的な方向に移し、大塚遺跡が位置する鶴見川・早渕川流域の下末吉台地全体を見渡して、その放棄－廃絶の様相を探る。大塚遺跡の位置する鶴見川・早渕川流域では、港北ニュータウンの1,300万平米におよぶ開発面積の中に268箇所の遺跡が存在し、発掘調査が行われた。弥生時代に属する集落遺跡としては10数箇所の環濠集落と、更に多数の小規模集落が発見されている。また調査開始当初から集落群研究に重点を置いて調査が行われており集落間における社会・政治・経済などの有機的な結合を研究する上で格好のフィールドとなっている。発掘調査は終了したものの、整理作業は今なお継続中で、未報告の遺跡もある。

当該地域の弥生時代集落群研究は、田中義昭の一連の研究(田中 1976,1979a,1979b,1984a,1984b)から始まるといってよい。しかしこれらの研究が行われた当時はまだ弥生時代中期の宮ノ台式土器の細分研究が進んでおらず、集落群を共時的に扱わざるを得なかった。したがってこの地域における弥生社会においては、拠点集落と周辺集落という構図がもっとも強調されていた(田中

1976、武井 1986)。その後宮ノ台式土器のより詳細な編年研究が進み(松本 1988、安藤 1990)、詳細な変遷をたどることができるようになった。その変遷をもとに各集落遺跡から出土した土器を比較・検討することによって集落が存在した相対的な時期が明らかになり、この地域における弥生集落の動態が検討された(安藤 1991a)。

今後の検討ではこの成果をもとに集落遺跡群の変遷をたどる。集落の消長を確認し、大塚集落の住人の移動先や生計戦略としての農耕等について検討する。耕地の問題や墓地の問題を民族事例も絡めながら取り上げたいと考えている。

6、結びに

大塚遺跡における放棄－廃絶の状況について、個々の住居址の検討から集落の放棄－廃絶のプロセスまでをひと通り述べた。集落の放棄という行動を起こすに至る経緯とその過程、そして結果は一連の事象であり、これらの様相を明らかにすることは弥生時代の社会構造を理解する上で重要である。今後は前述のとおり集落動態から集落の消長をとらえ、放棄－廃絶の様相を探りたい。なお、この方法は古墳時代以降の集落の放棄－廃絶にもある程度適用が可能であり、相模原市内の集落遺跡における放棄－廃絶の様相も探る上で有効な方法であると考えている。

注

- (1) これは、重複する住居など柱穴しか検出できなかった以降も含めた環濠内住居址の総数である。このうち弥生時代後期に属する住居址が7軒ある。また、この他に環濠の外に宮ノ台期の住居が1軒検出されている。
- (2) 穴戸信悟氏の計上(穴戸 1996)から得た値である。
- (3) これは、桐生氏の分析方法(桐生 1993b)にほぼ準じている。
- (4) 不慮廃屋という言葉は、大場磐雄博士が1955年に長野県平出遺跡の調査報告書の中で、堅穴住居址の廃絶の原因を移転のため(自然廃屋)、災害のため(不慮廃屋)としたことから用いた。桐生氏はこれに加えて意図的な火災による廃屋を焼却廃屋と呼んでいる。
- (5) 壁を同心円上に拡張している住居を連続的重複とする。これは住居の建て替えなどによるものと想定されている。なお、同心円上ではなく新しい住居が古い住居を切り込んでいるものを非連続的重複と呼ぶ。
- (6) 連続的重複および非連続的重複が見られる住居の重複の回数はそれぞれ、大塚Ⅰ期はY17が3、Y23が2、

Y25が2、Y39が2、Y45が2、Y12が2、大塚Ⅱ期はY2が2、Y18が3、Y20が3、Y40が2、Y48が2、Y65が6、Y68が2、Y60が2、大塚Ⅲ期はY7が2、Y15が2、Y51が2、Y77が2、Y78が2、Y79が2、Y84が2、となっている。

- (7) 住居の平面形を短径と長径の比率から5つの群に分類し、それぞれの群の時期的な変遷を求めたが、系統的な変遷は得られなかった。ただし、それぞれの平面形群の分布は、どの群も均一に近い値を示していることが確認された。(倉林 1997)
- (8) 最近接尺度値の求め方は、実際に分布するn個の点から各々の最近接点までの距離rの平均値 $\bar{r}_A$ を、ランダム分布に基づく理論的な直線距離の平均値 $\bar{r}_E$ で割って表される。
- (9) ただし、折本西原遺跡のY49号住居址のように、床面に大量の完形土器が遺されている例は大塚遺跡にはほとんどない。
- (10) この他に、住居の放棄にかかった時間と遺物の量に関する調査として、19世紀末から20世紀初頭にかけてカナダで起きたゴールドラッシュ時における、採掘キャンプの放棄状況の調査がある。(Stevenson 1982)。当時の新聞やその他の出版物から、複数の採掘キャンプがそれぞれどのように放棄されたのかということと、放棄後の実際の状況を照らしあわせたものである。その結果、付近の鉱脈の金採掘量が減少して漸次放棄されていったキャンプと、遠く離れた場所に有望な鉱脈が発見されたために極めて短期間で放棄されたキャンプとの間には、その遺物のあり方に大きな差があった。

参考文献

- 安藤広道 1990「神奈川県下末吉台大地における宮ノ台式土器の細分(上・下)」『古代文化』42-67
- 安藤広道 1991a「弥生時代集落群の動態」『横浜市埋蔵文化財センター調査研究集録』(8)
- 安藤広道 1991b「相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分」『唐古』田原本唐古整理室OB会
- 安藤広道 1992「弥生時代水田の立地と面積－横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代中期集落群からの試算」『史学』(61)
- 安藤広道 2013「弥生時代集落遺跡の分析方法をめぐる一考察」『横浜市歴史博物館紀要』(17) 横浜市歴史博物館
- 石井寛 2010『大柵杉山神社遺跡 歳勝土南遺跡』(財)横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会

- 石井寛 2012 「早瀬川流域の弥生時代中期集落址群－綱崎山遺跡の資料追加報告を中心に－」『横浜市歴史博物館紀要』(16) 横浜市歴史博物館
- 石野博信 1984 「古代日本の日常什器」『橿原考古学研究所論集』(6)
- 石森晃 1996「住居の廃絶の一形態『焼却処分』について」『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐる』資料集』山梨県考古学協会
- 伊丹徹 1993 「弥生時代の集落」『かながわの考古学』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 今泉潔 1989 「竪穴住居址の解体と引越し」『史館』(21) 史館同人・広文社
- 桐生直彦 1989 「床面出土土器の検討（Ⅰ）－東京都における縄文時代住居址の事例分析を通じて－」『物質文化』(52)
- 桐生直彦 1993a 「甗の特異な出土状態について－東京都における弥生時代後期～古墳時代中期の事例から－」『東国史論』(8)
- 桐生直彦 1993b 「床面出土遺物の検討（Ⅱ）－東京都における弥生時代～古墳時代中期住居址の事例分析を通じて－」『物質文化』(56)
- 久世辰彦 2001『集落遺構からみた南関東の弥生社会』六一書房
- 倉林真砂斗 1997 「遺跡内分析の方法論的展開」『住の考古学』同成社
- 小林謙一 1996 「竪穴住居のライフサイクルからみた住居廃絶時の状況－南関東の縄紋中期集落での遺物出土状態を中心に－」『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐる』資料集』山梨県考古学協会
- 小林達雄 1986 「原始集落」『岩波講座日本考古学』(4) 集落と祭祀 岩波書店
- 小宮恒夫ほか 1994 『大塚遺跡－弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅱ 遺物編－』
- 穴戸慎吾 1996 「甕は伏せておく－宮ノ台期の住居床面に伏せられた甕とその居住空間－」『神奈川考古』(32)
- 武井則道 1986 「弥生時代の南関東」『岩波講座日本考古学』(5) 文化と地域性 岩波書店
- 田中義昭 1976 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』(87)
- 田中義昭 1979a 「南関東の弥生時代集落」『考古学研究』(25-4)
- 田中義昭 1979b 「弥生時代における耕地と集落」『日本考古学を学ぶ』(3) 有斐閣
- 田中義昭 1984a 「弥生時代集落研究の課題」『考古学研究』(31-3)
- 田中義昭 1984b 「稲作の発達と分業生産」『日本歴史大系1 原始・古代』山川出版社
- 西秋良宏 1995 「放棄行動に関する最近の考古学的研究」『東海大学校地内遺跡調査団報告』(5)
- 西川修一 1991 「弥生の路・古墳の路－神奈川の場合」『古代』(92)
- 野林厚志 1996 「台湾ヤミ族の出小屋における放棄行動に関する民族考古学的研究」『考古学研究』(43-2)
- 松本完 1988 「南関東における中期環濠集落の終焉前夜」『弥生集落の環濠をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
- 武藤康弘 1996 「民族誌からみた縄文時代の竪穴住居」『考古学研究』(43-2)
- 村田文雄 1992 「火災住居址からみた住居空間考(覚書)～弥生時代竪穴住居址の若干の事例分析から～」『武蔵野の考古学 吉田格先生古希記念論文集』
- 横浜市埋蔵文化財センター 1990 『全遺跡調査概要』
- 横浜市埋蔵文化財センター 1991 『大塚遺跡－弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅰ 遺構編－』
- (財)横浜市ふるさと歴史財団 1994 『大塚遺跡－弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅱ 遺物編－』
- Brooks,R.L. 1993 Household abandonment among sedentary Plains societies: behavioral sequences and consequences in the interpretation of archaeological record. Abandonment of settlement and regions - Ethnoarchaeological and archaeological approaches, Edited by C.M.Cameron and S.A. Tomka. Cambridge University Press.
- Cameron,C.M. 1993 Abandonment and archaeological interpretation. Abandonment of settlement and regions - Ethnoarchaeological and archaeological approaches
- Schlanger,S.H and Wilshusen,R.H. 1993 Local abandonments and regional conditions in the North America Southwest. Abandonment of settlement and regions - Ethnoarchaeological and archaeological approaches
- Stevenson,M.G. 1982 Toward an understanding of site abandonment behavior: evidence from historic mining camps in the Southwest Yukon. Journal of Anthropological Archaeology1